


上/〈寒日〉桐葉 石膏 アクリル
21.5 x 8.0 x 15.0 cm / 2014
下/〈たかいたかい〉桐葉 石膏 木材 アクリル
18.5 x 12.5 x 11.0 cm / 2016

〈梨餅〉桐葉 石膏 アクリル
12.0 x 8.0 x 12.0 cm / 2010



あなたが思い浮かべた

その人 

がこの作品のモデルです

平面の裏側を求めて立体へ

一つの平面に描かれる空想世界。キャンパスに重なるものたちの裏側は、一体どうなっているのだろうか？ その裏側がみたい。三重県を制作拠点とし、東京はじめ全国で活躍している立体造形作家、植野のぞみが学生時代に抱いた、ちよつとした疑問である。多摩美術大学で油彩画を専攻していた彼女は、「動き」に対して自由な表現が可能な平面に、どこか物足りなさを感じたのである。重力の影響を受ける代わりに、頭の中でゼロから三次元のものを作り出すことができる立体造形。その魅力に惹かれた植野は、大学4年生時に、平面から立体の世界へ足を踏み入れた。

植野は桐の粉と糊を混ぜ合わせた「桐塑」という粘土を使って立体作品を制作する。削っていく彫刻と足していく彫塑。彼女は後者を選んだ。絵具を重ねていく絵画のように、足したり引いたりしながら材料とやりとりができる素材を選んだのは、元々絵を描いていた植野にとって必然だったのかもしれない。色彩が作品の特徴の一つになっているのも、彼女ならではの、凸凹したキャンパスに絵具を塗る感覚で彩色しています」と言う植野は、下地から中間色、ハイライトにまで、色にこだわる。奥行きを表す粘土と作品を印象づける色彩を施して初めて、作品は完成するのだ。

植野のぞみ

NOZOMI UENO